

英詩

言語学からの洞察

鑑賞

ジェフリー・N・リーチ著
島岡 丘・菅野弘久共訳

リーベル出版

英詩鑑賞

言語学からの洞察

ジェフリー・N・リーチ著

島岡 丘 菅野弘久共訳

江苏工业学院图书馆
藏书章

リーベル出版

英詩鑑賞

1994年4月1日	初版発行 ©	定価 3,296円 (本体3,200円)
-----------	--------	--------------------------------

翻 訳 者	島 岡 丘 共 訳
	菅 野 弘 久
発 行 者	串 原 国 穂
組 版 所	日 本 ハ イ コ ム
印 刷 所	互 恵 印 刷
製 本 所	関 山 製 本 社

発行所 リーベル出版 (Liber Press)

〒101 東京都千代田区神田神保町3-17-3
電話 (03)3234-1368 FAX (03)3234-0709

ISBN4-89798-403-3 C3082

はしがき

詩とはなにか。この問いに対し、古来より、さまざまな定義が与えられてきた——たとえば力強い感情が溢れ出たもの（ワーズワース）、〈最良のことばを最良の順序に並べたもの〉（コールリッジ）、〈永遠の真実に表現された人生の姿〉（シェリー）、〈美のリズミカルな創造〉（ポオ）というように。しかし、言うまでもなく、すぐれた洞察にもとづくこれらの定義をもってしても、詩のすべてを語り尽くせるものではない。それは詩というものが、なにか具体的な質量をもつ外在的なものとしてあるのではなく、読者個人がことばと向かい、そのことばを契機として自己の想像／創造力を飛翔させるときに生まれるものだからであろう。結局のところ、いかにことばと向き合うかが、詩を読む場合のアルファでありオメガとなる。

Geoffrey N. Leech の *A Linguistic Guide to English Poetry* (1969) は、その一つの向き合い方を教えてくれる。〈言語学からの英詩案内〉という題名が示すように、本書は詩のことばを音韻論、統語論、意味論などの言語学の洞察をもとに解明したものである。一篇の詩について語ろうとすると、ともすれば詩に込められた意味や詩人の思想、感情などを求めることが優先されやすいが、ことばは思想や意味を伝えるだけでなく、それ自体さまざまな響きや調子をもち、さらにそれが詩の価値の一部となっていることを忘れることはできない。リーチは（とくに、われわれには外国語である英詩を読む場合に）見落としがちな、ことばのさまざまな色合い、肌理を豊富な例によって具体的に示している。この点で本書は、とくに英詩を読み始めた者、また彼らに詩の魅力を語る教師たちに大いに益するところがあると思われる。

本書には数多くの詩が引用されているが、その訳出にあたり、翻訳があるものについては利用させていただいた。なお翻訳引用について、その都度訳者のお名前を示すべきところ、本文のスペースの関係から、一部（＊を付す）章末の注部分でまとめた失礼をお許しいただきたい。引用させていただいたものについては、〈文体論〉的考察についての和書文献、その他とともに巻末

に挙げておいた。あらためて訳者の方々のすぐれた訳業に敬意を表したい。言語学関係の術語や文学用語、とくに題名などについては、一般に通用しているものとするよう心がけた。原語（原題）についても、スペースの都合上、誤解のない範囲で省略し、事項・人名の両索引で一括した。言語学と文学という二つの領域をふくむ内容のため、翻訳の作業は、菅野が準備した訳稿を、島岡が言語学の立場から検討し、加筆・修正を行うという形で、それぞれの専門分野で補い合いながら進めた。なお校正については、菅野が全体を検討し完璧を期した。リーチのこの原著は、出版以来、多く版を重ねているにもかかわらず、日本国内ではあまり注目されないのは残念なことである。この意味でも訳書を通して、原著の優れた内容が幅広く理解されることを望みたい。また、とかく言語学と文学と専門別になる傾向が強くなることを考えると、本書の意義はきわめて大きいものがあるのではないだろうか。本訳書の出版にあたり、リーベル出版の串原国穂氏にたいへんお世話になりました。深く感謝申し上げます。

1993 年 11 月

訳 者

緒 言

〈おそらく隠喩ほど心地よい文彩はないのではないか。隠喩は、あらゆる者のことばでありながら、とりわけ天才に特有のものだからである〉と18世紀の言語哲学者ジェームズ・ハリスが書いた¹。この発言はアリストテレスの言明に支えられたものとはいえ、それに先立ち、また誘因となる文体論的比較の実践（クノーを連想させる）ほど、われわれの関心を引くものではない。‘Don’t let a lucky Hit slip; if you do, be-like you mayn’t any more get at it’ 〈幸運を逃さないように。逃がしたら最後、おそらく二度と手にすることはありませんよ〉のような俗っぽい言い方は、‘Opportune Moments are few and fleeting; seize them with avidity, or your Progression will be impeded’ 〈時宜を得た瞬間など少なく、またはかないものです。その瞬間を熱心にとらえなさい。そうでなければ、あなたの前進は妨げられましょう〉のような気取った言い方に対するが、どちらもブルータスが、好機に乗じる（‘taking a tide at the flood’）という同じ考えを隠喩で表現したのとは対照的である。ハリスがいうように²、〈内在する優雅さ〉を除けば、隠喩によることば使いは、〈自分自身で何かを発見させること〉を読者に委ねることで読者を喜ばせる。

詩のことばの研究には隠喩以上のものがふくまれる。ハリスのようにすぐれた言語学者でも、チョーサーの詩に耳を傾けなかった（〈たいへん粗雑〉）³。それでもおよそ200年前に、言語学と文学批評が〈手を携える〉ために控え目な数歩を歩み出したことを知るのは興味深い。現代において、このミルトンの姿を十分に認識するのに、どれほど離れているというのだろうか。アメリカの学者リチャード・オーマンは、言語理論の進歩にもかかわらず、文学批評家たちはその古い無知な主観的習慣を保ち続けているということを、仮

1 *Philological Inquiries* (London, 1781), 186.

2 同上, 197.

3 同上, 468.

借なくわれわれに語る——〈最も役立つ文体研究の生じるところは、批評家のありのまま直感だが、それは文学的洗練さと伝統文法のぼろぼろの衣裳によって、わずかに無視の風から守られている。とくに理論の欠如のために、ことばのより深層の構造的な特徴、まさに文体論的記述に最も深く入り込んでいる特徴そのものを、批評家が説明できないのは致命的欠陥である〉⁴。

オーマンがこのように批評家たちを厳しく非難することも、彼が当時流行した特別な言語理論の可能性をどれほど評価していたかについて、われわれがどう認めるかで、正しいとも正しくないとも考えられる。しかし、最近の多くの文学に関する言語学の著作は入門的で退屈であり、労の多い割には的はずれで、真面目に取り上げるのに値しない、あるいは驚くほど風変わりな作家の文体に夢中になっているのが関の山だ、と反論する批評家がいることも、われわれははっきりと認めなければならない。とはいえ最近では、言語学者も徐々に文学テキストに注目し、またオーマンが言うように、批評家の関心も高まる中で、〈文体論的分析の実践における洗練さ〉が可能となりつつあることは疑問の余地がない。こうした展開の中で、ジェフリー・リーチは注目すべき役割を担っている。この数年間に彼の著作は、言語学的文体論の論集の編集者から求められている。しかし本書では、論集が定義通りに試みられる以上のことを達成している。一心に、感受性豊かに読み込み、ある一つの言語学的構造を推論的に、またある深度をもって、広範囲にわたる英詩の分析に応用すること。したがって本書は、英文学を学ぶ者（もともと彼らのために本書は書かれている）のみならず、上級の読者にもきわめて有益なものとなるだろう。また言語学が自分たちの学問分野に与えるものを、少しでも理解したいと思う批評家にも、リーチ氏と同じ言語学者たちも、必ずやその説明から得るものがあるだろう。

また、これまでも成功を収めた著作のように、本書もその取められるシリーズで大いに迎え入れられるだろう。われわれのことばと文学は、ますます世界的規模で研究されるにつれ、英語とその使われ方にもっと多くの情報を強く求める声が高まっている。《英語学シリーズ》は、こうした要望に応じて、現代英語に最も関係した話題——英語の歴史や伝統、音型、文法、語彙論、話すことと書くことの豊かな多様さ、イギリスとアメリカ、またその他の英

4 *Word*, 20 (1964), 426.

語が使われている主な地域での基準など——を、最新の情報も取り入れながら学問的に扱い、英語の研究や教育をさらに刺激するという役割を担うものである。

ロンドン大学

1968 年 8 月

ランドルフ・クワーク

序 文

本書は英文科学生向けの文体論入門科目として意図されたが、文体論を学部一年生に教えた私自身の経験がもとになっている。〈まったくの無から始める〉という意味では、本書は〈入門的〉でも、現在広く用いられている文体論の研究方法を概観するつもりはなく、むしろ入門的な一般性から細部を検討する実践的なテキスト解釈へ向かう、ある特別な研究方法を展開することを目指す。以下のページから浮かび上がってほしいことは、かいつまんでいえば、文学テキストのことばを議論することの概要であり、詩の解釈に関心をもつ者が言語学的事象を参照するための枠組である。

ここでは、文学研究の言語学的側面と批評的側面は相補的なものと見なされ、前者が後者の手段となることが強調される。本書を執筆する動機の一つに、文学批評と言語学の二つの学問分野は、合い携えるのではなく反目し合うという意見を、言語学者とか批評家とかに関係なく、その狭量と想像力の欠如から助長する者への苛立ちということがある。大学の英文科で真に求められる教育内容を提供することに加え、誤解の霧をいくらかでも払拭することに本書が役立てばと思う。

最初の二章は他章よりも目立って平易かもしれない。英語を学ぶ多くの者に馴染みのある分野を扱うが、以後の章で展開する慎重な分析的アプローチのためには欠かせない準備となるものである。

さらに議論を深めるために、詩の一節を各章末に挙げておいた。教師や学生の必要性和感性に応じて自由に扱っていただきたい。各例について、どこまでも実りある議論を展開するなら、詩の背景となる知識——伝記的、文化的、社会的背景などの知識——についても、多少は必要となることが指摘されなければなるまい。したがって、それらは内容をすっかり理解していればできる、教科書の課題のようなものと同じではない。理想的には、それぞれの詩の議論を始める前に、私がその都度加える注釈よりも、はるかに詳しい背景の説明が行われるべきであろう。

私はランドルフ・クワーク氏に、月並みな形で著者が編集者に負うよりも、はるかに多くを負っている。たえず励ましていただき、最も一般的な理論の問題から説明の仕方、字句の配列というきわめて実적인点まで、すべての事柄にわたりお導きをいただいた。また以下の方々にも感謝しなければならない。学科長のフランク・カーモード氏には、関心を示していただいた上に助言をいただいた。ジョン・チョーカー氏とフランク・フリッカー氏には、文学的な観点から貴重なコメントを頂戴した。シドニー・グリーンバウム氏には本書のタイプ原稿を査読していただき、わざわざU・オルナンのヘブライ語の論文も要約していただいた。ロジャー・ファウラー氏には第7章を詳細に批評していただいた。また、ありがたいことに義父ジョージ・バーマン氏には、校正の仕事を引き受けてもらった。『詩人が使うことば』から私がウィニフレッド・ナウツニー氏に負うものは、本書のほぼ各章から明らかになるだろうが、さらにそれは個人的な面にも及ぶ。ロンドン大学の学生としてご指導を受け、後に著書にまとめられた講義に出席できた忘れられない喜びを感じているからである。ロンドン大学英文科の同僚諸氏には、さまざまな文学鑑賞のポイントについて専門家の知識を与えていただいたことを感謝いたします。

最後に、適切な例を求める獵場として、J・M&M・J・コーエン編『ペンギン引用句事典』の助けを借りたことを申し添えておきます。

ロンドン大学
1968年8月

GNL

著 者

Geoffrey N. Leech

1936 年 Gloucester の生まれ、University College London 卒業、Lancaster 大学教授、Ph. D. 著書は本書の他に、*English in Advertising: A Linguistic Study of Advertising in Great Britain* (1966), *Towards a Semantic Description of English* (1969), *Meaning and the English Verb* (1971) (『意味と英語動詞』大修館、1976), *Semantics* (1974) (『現代意味論』研究社、1977), *Explorations in Semantics and Pragmatics* (1980) (『意味論と語用論の現在』理想社、1986), *Principles of Pragmatics* (1983) (『語用論』紀伊國屋書店、1987) *An A-Z of English Grammar and Usage* (1989) があり、共著として *A Grammar of Contemporary English* (1972), *A Communicative Grammar of English* (1975) (『現代英語文法』紀伊國屋書店、1977), *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose* (1981), *Grammar for the Present Day* (1982), *A Comprehensive Grammar of the English Language* (1985) がある。

訳 者

島岡丘 (しまおか・たかし)

筑波大学教授 博士 (言語学)

1932 年生まれ、東京教育大学英語英文学科卒業、専門は英語教育・英語音声学、外務省研修所講師、NHK ラジオ英会話講師、筑波大学外国語センター長などを務めた。現在、日本英語教育研究所長、国際コミュニケーション英語研究所 (IRICE) 代表、英語教育協議会 (ELEC) および語学教育研究所評議員として活躍中。主な著書は、『英語学と英語教育』(共著、大修館書店)、『語源で覚える英単語飛躍増殖辞典』(創拓社)、『リスニング・チャレンジ』(研究社)

菅野弘久 (かんの・ひろひさ)

桐朋学園大学短期大学部専任講師

1958 年生まれ、茨城大学教育学部英文科卒業、筑波大学大学院文芸言語研究科博士課程中退、専門はイギリス文学 (ルネサンス詩)。筑波大学現代語・現代文化学系準研究員を経て、現職、『ルネサンスと十七世紀英文学』(共著、金星堂)。

目 次

はしがき iii

緒 言 v

序 文 ix

序 論 1

0.1 〈言語－文学〉の問題 1

0.2 記述的修辞学 3

0.3 詩のことばと〈ありふれた〉ことば 5

0.4 起こりうる不安 6

注 7

第1章 詩と過去と現在のことば 9

1.1 英語用法の多様性 9

1.1.1 方言 9

1.1.2 言語使用域：状況に応じた用法 10

1.2 詩におけることばのコンヴェンション 13

1.2.1 順守の傾向 14

1.2.2 古語法の機能 15

1.2.3 詩のことばと〈詩的な〉ことば 16

1.2.4 荘重体・中庸体・平明体 18

1.2.5 詩作のお決まりの許容 19

課題 22

注 24

第2章 ことばの創造的使用26

2.1 平凡さからの離脱 26

2.2 〈創造的〉の二つの意味 27

2.3	詩における散文の特質	29
2.4	ことばの大胆さの度合い	33
	課題	38
	注	40
第3章	詩的許容の多様性	41
3.1	ことばの解剖	42
3.1.1	三つの主要レベル：具現化・形式・意味論	42
3.1.2	音韻論と書記素論	44
3.1.3	意味と意義	45
3.1.4	言語学の補助的範疇	46
3.2	逸脱の類型	47
3.2.1	語彙の逸脱	47
3.2.2	文法の逸脱	50
3.2.3	音韻的逸脱	53
3.2.4	書記素論的逸脱	53
3.2.5	意味論的逸脱	54
3.2.6	方言の逸脱	55
3.2.7	言語使用域の逸脱	56
3.2.8	歴史的時代の逸脱	58
3.3	結び	60
	課題	60
	注	62
第4章	前景化と解釈	64
4.1	前景化	64
4.1.1	芸術やその他における前景化	64
4.1.2	一例	66
4.2	解釈	67
4.2.1	解釈の主観性	67
4.2.2	逸脱の〈根拠〉	70
4.3	並列法	71

4.3.1	前景化された規則性としての並列法	71
4.3.2	どの程度の規則性か	74
4.3.3	同一性と対照性の型	75
4.3.4	並列法の解釈	76
	課題	79
	注	80
第5章	ことばの反復	83
5.1	スキームと文彩	84
5.2	形式的反復	87
5.2.1	自由なことばの反復	88
5.2.2	ことばの並列法の類型	90
5.2.3	ことばの並列法の機能	95
	課題	99
	注	101
第6章	音 型	102
6.1	音節内の音型	102
6.2	強勢に関係する音型	104
6.3	詩の〈音楽〉	106
6.4	音型の解釈	109
6.4.1	〈共鳴〉	109
6.4.2	擬声語	110
6.4.3	擬声語の多様性	111
	課題	114
	注	117
第7章	韻 律	118
7.1	リズムと韻律	118
7.2	英語のリズム	120
7.2.1	格調：リズム単位	121
7.2.2	どの音節に強勢がつくか	122
7.2.3	休止	123

7.2.4	音節の長さ	123
7.3	韻律と詩行	126
7.3.1	リズム並列法としての英語韻律	126
7.3.2	伝統的韻律法の〈詩脚〉	128
7.3.3	詩行	129
7.3.4	韻律の数的諸相	131
7.3.5	有強勢韻律	134
7.4	リズムと詩形式の相互作用	136
7.4.1	予測はずれ	136
7.4.2	韻律の変種	137
7.5	文法と韻律	139
7.5.1	句またがり	140
7.5.2	〈詩段落〉	143
	課題	146
	注	146
第8章	詩の不合理性	149
8.1	意味を論理的に見る	149
8.1.1	意味論的奇妙さの類型	149
8.1.2	定義と記述	153
8.2	詩における余剰性	155
8.2.1	冗語法	155
8.2.2	同語反復	156
8.2.3	迂言法	158
8.3	詩における不合理性	160
8.3.1	撞着語法	160
8.3.2	逆説	163
8.4	理性と真実性を越えて	164
	課題	165
	注	167
第9章	比喩的なことば	168

9.1	意味の転移	169
9.1.1	提喩	171
9.1.2	隠喩	172
9.1.3	換喩	173
9.2	隠喩の諸相	175
9.2.1	隠喩の分析の仕方	175
9.2.2	直喩と隠喩	178
9.2.3	隠喩の概念上の部類	180
9.2.4	拡張された隠喩	181
9.2.5	複合隠喩と混合隠喩	182
9.2.6	象徴主義と寓意	184
	課題	187
	注	189
第 10 章	誠実な斯基	190
10.1	誇張法と緩叙法	191
10.1.1	誇張法	191
10.1.2	緩叙法, または修辭的に控え目に言うこと	193
10.1.3	誇張法と緩叙法の用法	194
10.2	アイロニー	196
10.2.1	アイロニーの仮面	196
10.2.2	アイロニーと隠喩	199
10.2.3	ほのめかし	201
10.2.4	声調のアイロニー	202
	課題	206
	注	210
第 11 章	文脈の含意	211
11.1.	状況の許容	212
11.1.1	修辭疑問文	212
11.1.2	頓呼法	213
11.1.3	状況によるお決まりの許容	214

11.2	特定の状況	216
11.3	〈詩中の世界〉	218
11.3.1	推論される状況の導入	220
11.3.2	限定された意味をもつ語	224
11.3.3	事実と虚構	226
11.3.4	ありえない状況	229
11.4	状況と行為	231
11.5	結び	235
	課題	235
	注	238
第 12 章	曖昧と不確定性	239
12.1	曖昧の種類	239
12.2	地口とことば遊び	243
12.2.1	さまざまな技巧	244
12.2.2	地口の擁護	248
12.3	開かれた解釈	250
12.3.1	多義的意義と不確定的意義の源泉	251
12.3.2	視覚芸術のアナロジー	253
12.3.3	最善の解釈を求めて	256
	課題	257
	注	260
結 章		262
参考書目		265
事項索引		273
人名索引		277